

戦前期花菰製造業をめぐる日本・中国間制度比較

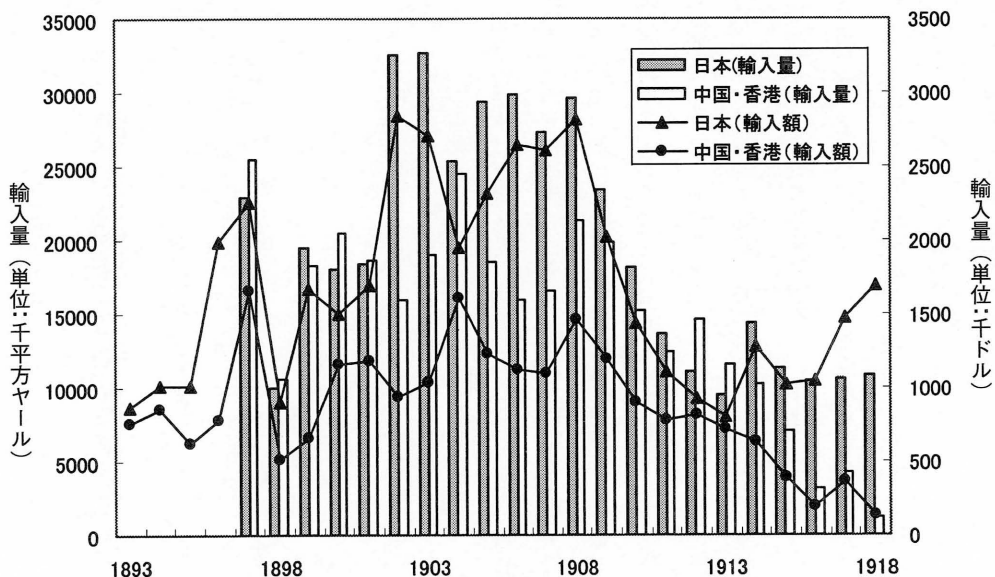
——日本の領事報告の分析を通じて

四方田雅史

はじめに

戦前の日本は、アメリカ向けを中心に、生糸や雑貨など労働集約的商品を大量に輸出してきた。労働が豊富で土地・資本が稀少であった当時の日本にとって、労働集約的産業が比較優位にあるのは、国際貿易理論（ヘクシャー・オールイン・モデル）にも合致している。対照的に、アメリカは、土地・資本が豊富で労働が稀少であったために、日本が輸出する労働集約的商品の重要な販路となった。しかし、日本のような要素賦存状況は、中国をはじめ、東アジアに共通する特徴である。東アジアは、程度の差こそあれ、労働が豊富である一方、資本や土地が不足していた。このように類似した状況にあった東アジアでは、生糸・雑貨輸出をめぐる、熾烈な「アジア間競争」が繰り広げられたのである。

本稿では、労働集約的輸出品のなかで、花菰を取り上げる。花菰は、中国が当初アメリカ市場を席巻した後に、日本が後追いたした製品であり、先行する中国の長所を日本が学ぼうとした点で興味深い題材である。しかし、日本経済全体から見れば、短期間のうちに日本の主要輸出品として台頭し、その後まもなく主要輸出品の座から滑り落ちた、短命な輸出品でもあった。そのためか、世界市場（とりわけ主な市場であったアメリカ）における花菰の競合関係を正面から論じた論文は、神立春樹氏の研究や清川雪彦・牧野文夫両氏の研究など、わずかしかない。前者は、輸出用花菰の主要産地であった岡山地方の経済史的研究から派生したものであり、一九〇七年以降にアメリカ市場で日本産花菰が後退した要因を正面から論じている。神立氏は、中国の低賃金とアメリカにおける代替品の機械製大量生産とに対抗し得なかったことに、輸出後退の要因を求めている。そ



[出所] Foreign Trade and Navigation of the United States, various years.

[注]たとえば1893年は、1892年7月1日から1893年6月30日までの年度をさす。

図1 アメリカ市場における花菰輸入動向

の裏返しとして、一九〇七年以前に日本産花菰の躍進を可能にしたのは、日本の低賃金であったとする含意が隠されている^⑤。すなわち、氏の研究では、日本と中国が、アメリカ市場で直接競合したとみなされたため、低賃金が輸出拡大の武器と考えられたのである。それに対し、後者の研究は、輸出躍進の要因を、日本の蘭菰^⑥製造業が技術革新を繰り返し、全要素生産性 (total factor productivity) を高めることができたことにもとめ、技術革新を可能にした制度的要因として、同業組合や政府による輸出品検査制度・共進会・特許制度などが重要であったことを指摘している。そこでは日本における制度の優越性が述べられているものの、中国との違いに関する言及がないという問題がある。

日本と中国の競合関係は、一方が他方を圧したと言えるほど、単純なものではなかった。図1は、主要輸出先であったアメリカの輸入統計から、一八九三〜一九一八年度のアメリカにおける日本・中国からの輸入量・輸入額を示したものである。香港からの輸入は広東から香港経由で輸入されたものであるため、中国と香港を合計してグラフにしている。アメリカで花菰に輸入関税が課されるようになったため、一八九八年度に日中両国からの輸入量とともに激減しているが、その後、両国ともに、輸入量・額は増減を繰り返している。量・価額ともに、日本が中国を上回るようになったことは、全体の趨勢と言えるものの、日本が中国に一方的に勝利したり、

逆に一方的に押されたりする現象は見られなかったと言ってよい。

また、日本と中国の蘭菰製造業がアメリカ市場で直接競合していたとはいえない部分もある。以下に示す通り、日本と中国の輸出する蘭菰は、質を異にしており、異なる購買層を有していた。価格によっては競合関係が見られたものの、差別化されていたのである。それにくわえ、日本産と中国産の花菰にはそれぞれ一長一短があり、消費者の花菰に対する需要が時とともに変化することはあっても、一方が他方を圧倒するような状況はついに起こらなかったものである。そうであれば、先に取り上げた研究が前提とするように、日本産蘭菰が一方的に勝利（もしくは敗北）した要因のみを検討することは一面的である。従来の研究が持つこうした欠点を克服するために、日本と中国が特徴を異にする蘭菰を輸出するに至った要因も、視野に入れないといけない。具体的に言えば、日本と中国では、産地内取引を組織化し秩序づけている制度的要因が異なっており、そうした要因の違いが質の異なる蘭菰の生産に比較優位を与えたという視点からも分析する必要がある。中国では主要産地である広東を取り上げ、日本では花菰の産地であった岡山・福岡の史料を用いて、比較したい。それぞれの国において同様の位置にある地域を比較することによって、比較に説得力を持たせることが期待できよう。

本稿は、史料として、主に日本の領事報告（『通商報告』・『通商彙

纂』など）を用いる。領事報告は、日本人がアメリカ市場や中国の動向を観察・記述したものであるため、観察している日本人の偏見・先入観に影響を受ける。花菰に関する報告に限っても、以下に示す通り、一九世紀末と一九〇〇年代末との間には、中国の評価について違いが見られる。そこには、両産地内の変化とともに、日本人の中国観が変化したことも反映していよう。しかし、広東の取引事情に関しては、現地に直接赴いた商人からの情報を基にするなど、領事は報告の信憑性を高めようと努めていた。このように、史料の限界はあるものの、それを考慮した上で明らかにできる事実も多い。この領事報告を利用することによって、そこに潜んでいる日中の違いの一端を解明したい。

1 アメリカ市場における両国産蘭菰の評価

最初に、前掲図1の統計を用いて、日本と中国の競合関係を分析しよう。単価を比べてみると、概して、日本産の方が中国産の一・五倍前後と高価であったにもかかわらず、日本産の売れ行きは好調であった。すなわち、日本産の方が高品質であり、価格面での競争だけではなかったことを物語る。しかし、品質は違っても代替関係にあった可能性も考えられる。一般に代替関係（粗代替財）にあり、日本産の価格のほうが相対的に高くなれば、日本のシェアは低下するはずである。その関係を念頭に、日本のシェア（＝日本の輸入

量：日本・中国・香港からの輸入量合計」と両国の価格比（＝日本の単価÷中国の単価）の相関係数を求めた。その間の相関係数はマイナス〇・〇五八であり、ほぼ無相関であった。それぞれの変化率の相関は約〇・一五であり、価格比が上昇する（日本の単価のほうが相対的に高くなる）と、日本のシェアも上昇する傾向が見られたものの、正の相関があったとは断定し難い。¹² いずれにせよ、価格の違いは品質の違いに帰せられるものであり、価格競争よりも品質競争の側面が強かったと言えよう。

そのような関係を認めるならば、日本産と中国産のどちらが競争に勝利したか、という議論の立て方は一面的である。むしろ、日本産・中国産のそれぞれに長所と短所があった点を重視すべきではないだろうか。

次に、以上の点を史料から補強するため、アメリカにおける両国産蘭薊の評価をみてみよう。興味深いことに、日本が花薊輸出を開始した明治二〇年代には既に、その後まで続く両国産蘭薊の特徴がほぼ出揃っている。

「当国人（アメリカ人のこと…引用者）ガ支那製ノモノヲ嗜好スル所以ハ他ナシ第一薊ノ材料タル蘭ノ質強ク製造方緻密ニシテ周辺ノ結括堅牢ナルガ故ナリ尤モ其形容及ヒ色合等ハ日本産ノ方遙ニ優ル所アルヲ覚ユ」¹³

「日本産ヲ以テ支那産ニ比スルニ支那産ハ莖長ク質強キ原料ヲ使用シ光色一様ニシテ濃淡ナキモ日本産ハ草ノ首尾他ノ部分ヨリ色薄ク光沢平等ヲ欠クノ短所アリ但シ着色ノ工合ハ迥ニ支那産ニ勝レリ」¹⁴

以上の引用では、共通して、広東産蘭薊の長所として、「堅牢」で染色が一樣である点が指摘されている一方、日本産蘭薊については、形容や色合の点で広東産に勝るものの、「軟弱」で耐久力がなく染色が一樣ではないことが述べられている。同時期に、日本産花薊の輸出は緒にいたばかりであり、時代の制約のため、日本の領事が、広東産が市場を獲得していることを理由に、日本は広東産の長所を模倣すべきであると論じた記述もあった。¹⁵ しかし、実際には、その主張とは逆の展開をたどることになる。日本産蘭薊は、通常、広東産に特徴が酷似する九州（特に大分）産と、「軟弱」ではあるが模様の美しい中国地方（特に岡山）産の二種類に大別されるが、その後には輸出品として台頭したのは後者の方であり、前者は広東産に押されていた。その証左として、広東産に近い品質を生産していた大分県が、輸向け蘭薊生産から国内向け畳表生産に生産をシフトしていったことが挙げられる。¹⁶ すなわち、日本の輸向け蘭薊は、広東産蘭薊と競合するよりは、差別化を図ることによって、販路を拡大したのである。両国で生産された輸用蘭薊の特徴は、時

とともに収斂するどころか、むしろ差別化されたのである。明治三〇年代後半、さらに第一次大戦後になっても、明治二〇年代と同じ特徴を有したことは、以下の記述から窺える。

「該品（清国産花筵のこと…引用者）ハ意匠ノ巧ミアルニアラズ又ハ配色新奇ナルニアラズ千篇一律トモ評スベケレトモ品質堅牢ニシテ持続宜シトノ廉ニテ氣受宜シト云フ」¹⁸⁾

「要するに日支両国花筵に就いては一得一失あり…（中略）…広東品は其耐久力の強靱なる職工賃銀の低廉なる又製品の統一せるの点に於て到底本邦品の対抗し得ざるに反し其織方の巧妙なる意匠の嶄新なる接合の完全なる諸点に於ては我は数等の上位にある」¹⁹⁾

「孟買に輸入せらるる數物殊に花筵類は支那製品及び本邦製品なるが、一般に支那品が無地物多く品質は比較的耐久力に富み然かも我製品より見て割安なるを以て市場に於ける氣受けよく需要も多しと云ふ。然るに本邦品は相当數量の輸入あるも、模様並サイズが限定せられ居るのみならず、品質劣り、耐久力に乏しとの非難ありて、出来栄えも一見美麗なるに拘らず好評を博し居らざるが如し」²⁰⁾

二・三番目の引用は、第一次大戦後の記述であるが、そこでも大

戦前のアメリカと同じような評価であった点は興味深い。すなわち、日本産と中国産の品質の違いは、長い間、維持されたのである。そのような状況では、両国産の蘭筵にはそれぞれ異なる需要が存在していた。その需要の差を決定する一因は、地域差にあった。

「元來本邦花筵ト支那花筵トハ画然別種ノ需要アルニアラザレドモ其品質價格ノ相異レルヨリ自然各自特別ノ顧客ヲ有シ随テ当国内ニアリテモ地方ニ依リ孰レカ一方ノ製品ヲ用ユル傾向アリ…（中略）…両国製品ハ夫々特長ヲ有シ從テ需要ノ区域ヲ異ニスレドモ若シ孰レカ一方ノ製品ニシテ品質ヲ落スコトアルカ或ハ著シク價格ヲ高ムルコトアルカ或ハ數量余リニ僅少ナルニ至ルガ如キコトアル場合ニハ他方ノ製品ニシテ之ニ代用セラルルヲ見ルコト少カラズ」²¹⁾

すなわち、一方の品質低下・価格上昇・供給不足といった事情によって、両者の間に代替関係がみられたものの、それぞれの花筵の需要層には相違があったという。さらに社会階層によって需要に違いがあったことは、たとえば以下の引用から読みとれる。

「日本花筵ハ意匠甚タ高尚ニシテ其縁円平敷合セノ工合良ケレハ価ノ不廉ナルニ不拘上中等社会ハ之ヲ嗜好スレトモ下等社会

ニ至リテハ支那産ノ厚ク強固ニシテ長時日ニ堪ヘ廉価ナルモノヲ択ムモノ多シ⁽²⁾」

日本産花筵が階層の高い消費者に好まれたのに対し、中国産花筵は低階層の消費者に好まれたようである。統計的に分析した先述の結果とも符合する。このように、中国産と日本産では質が異なっており、別の長所・短所を有するようになったのである。

「清国産ハ使用蘭草ノ強キ為メ縦糸ハ割合ニ少ナク模様ノ緻密精巧ナルハ到底本邦産ニ及ハサルモ其品質均一ニシテ着色一様ナルカ故ニ見本ニヨリ大口ノ取引ヲ行フニ便利ナルノミナラス当国小売商人カ一卷ノ花筵ヲ切売スルニ当リ其残余ヲ他ノ一卷ニ引継キ売捌クコトヲ得ヘシ⁽³⁾」

中国産は、模様が精巧ではないが、質が一律であるという長所を持っていた。特に花筵長物は切り売りされていたので、画一性・均質性は、取引上、重要な長所となったのである。それに対し、日本産は模様が精巧であるが、質が多様で大口取引に適さない特徴を有していた。言い換えれば、中国は「少品種大量生産」であつたのに対し、日本では「多品種少量生産」であつたと言えよう。

こうした特徴は、日本と広東の価格表示方法の差となつて表れて

いる。広東では、「織方又ハ堅糸数ニ拠テ区別スルコトナク常ニ一卷ノ重量ヲ標準トシテ品種ヲ分⁽⁴⁾」けて、価格が表示されていたといふ。品質が画一的な状況では、重量を基準とした価格表示で十分である。たとえば、東莞産花蓆（花筵）で、幅一碼、長さ四〇碼、重量四〇（四五斤）ならば、価格が一碼につき「七仙五厘」というように、産地、重量、ときには継目の有無によつて区別され、価格が一律に表示されていた⁽⁵⁾。後述する日本に比べ、価格表示の区分が細かいことは、商品が標準化されていた可能性が高い。すなわち、区分が細かくないとしても、取引に支障がなかったことが推察されるのである。

対照的に、日本における価格表示は、模様・産地・緯糸の本数によつて細分化されていた。以下にその価格表示の一部を掲げよう。

「本邦花筵相場表（三十七年六月調）」

| | |
|--------------------|-----------|
| 八十縦筑後二等白無地、染分飛形及縞物 | 三弗六十仙ヨリ四弗 |
| 八十縦筑後一等白無地、染分飛形及縞物 | 四弗ヨリ四弗四十仙 |
| ……（中略）…… | |
| 百八十縦筑後機械織在合品 | 四弗四十仙ヨリ五弗 |
| 百八十縦筑後短蘭注文製機械モノ | 四弗二十仙ヨリ五弗 |
| 百八十縦筑後長蘭注文製機械モノ | 六十仙 |
| | 五弗六拾仙ヨリ五弗 |

九十仙^⑭

上記は日本産花菴の卸価格である。項目が中国より細分化され、また同じ項目であっても卸価格に相当の幅があった。品質の相違によって、卸価格に差があったのであろう。このような価格表示の方法からは、日本産花菴の品質が標準化されていなかったことが示唆されよう。そのため、広東産に比べ、日本産花菴は大口取引には適していなかった。このように、それぞれ一長一短があり、時代と市場動向によって、あるときには長所になり、あるときには短所になる可能性があったと推察される。

以上のように、需要の相違は品質の違いによって生じていたが、品質の違いは使用される蘭草によって規定されていたことも知られている。一般的に、三角蘭（日本では七島蘭とも呼ばれた）は繊維が太いために耐久性のある蘭菴を織ることができるのに対し、丸蘭は繊維が細いため複雑で美しい模様を織ることができたという^⑮。広東・九州では、繊維が太く長い三角蘭が使用されたのに対し、岡山・広島などでは、繊維が細く染色も容易である丸蘭が使用されていたが、日本は両方の品質の蘭菴を生産・輸出できたにもかかわらず、比較優位を持ち得たのは、岡山産の方であり、広東産に類似した大分産蘭菴は、結果的に広東産に押されていたのである。また、中国でも丸蘭を使って蘭菴が生産されたが、たとえば、「丸蘭菴ハ

從來否尚ホ殆ント清国内地用ノ敷莫産ニ宛ツルモノニシテ染色品甚タ稀ナリ」や「其染料、染色方法等ハ從來ノ七島蘭清国花菴ト同一ニシテ又豎絲モ苧麻黄麻等ヲ用ユルコト清国花菴ニ同シ」とあるように^⑯、丸蘭を用いた花菴は、日本のような長所を持たず、むしろ三角蘭（七島蘭）を用いた中国産花菴に近い品質のものであった。中国では、どちらの蘭草を材料に使用しても、同じような花菴が生産されたことは興味深い。こうした事情を考慮すると、蘭草の種類だけで両国産蘭菴の相違を説明するのでは十分ではない。むしろ、広東には三角蘭を使用した蘭菴に比較優位があった一方、岡山には丸蘭を使用して多様な模様を駆使した蘭菴生産に比較優位があった理由が問われなければならない。次節以降、輸出蘭菴の代表的産地である広東と岡山の動向と、それを取り巻く制度とを比較していきたい。

2 広東における蘭菴製造業の制度・組織形態

広東の蘭菴製造業が詳述されている史料はきわめて少ない。そのため、それに関する研究はほとんどなされていないのが実情である。記録の少ない一因として、広東の商人や製造業者が部外者に情報を漏らすのを嫌ったことが、領事報告に頻繁に挙げられている。しかし、報告は現地に直接赴いた商人からの情報を基にするなど、上記の限界の中では報告の信憑性が高かったと言える。報告内容は限定

的であることは認めざるを得ないとしても、広東の特徴をいくつか取り上げ、それらをつなぎ合わせることににより、不完全ながらそのあり方を類推することは可能であろう。そして、こうした限定的情報だけでも、広東・岡山の蘭筵製造業が対照的な特徴を有していたことを理解することができる。

広東の蘭筵輸出に関する領事報告には、日本商人と違い、広東商人はきちんと約束を守るとの記述が散見される。まず、一八九五年の記述を引用しよう。

「支那地方ニ於テ本品（地蓆もしくは花筵のこと…引用者）ヲ取扱フ支那人ハ右取引ニ関スル契約ヲ書面ニ認メ置キ若シ違約アレバ直ニ違約金ヲ払フヲ約シ且克ク約束ヲ履行シテ期ヲ誤ルコトナキモ日本ノ製造家及取引者ハ動モスレバ約品請取渡シノ期限ヲ誤リ或ハ契約通りノ物品ヲ引渡サズ常ニ外国ノ取引者ヲシテ信約確守ノ能力ニ疑念ヲ狭マシムルヲ免レズ」^②

このように、日本と違って、広東の関係者に約束を「確守」させる要因とは何であろうか。その一因は、以下の文章に表れている。長い文章であるが、引用しよう。

「当地ニ於テ多年支那花筵ノ輸入ニ従事スル某商人ノ言フ所ニ

ヨレハ該品ノ積出地タル広東及香港ニ於テ外国商館ニ対シ其売込ヲ業トスル支那商人等ハ…（中略）…組合ヲ設ケ組合員ニアラサレハ外国商館ト取引スルコト能ハサル仕組ニシテ花筵売込業者ガ外国商館ヨリ或種類ノ注文ヲ引受タルトキハ其下受人ニ命シ更ニ之ヲ内地ノ製造人ニ分配シ一定ノ期日ヲ限り之ヲ製造セシムル…（中略）…若シ製造人カ約束ヲ違ヘ期日内ニ注文品ヲ製造セサルカ又ハ其他不正ノ所業アルトキハ之ヲ注文セル下受人ノ信用ヲ失ヒ再ヒ其注文ヲ得ルコト能ハサルノミナラス他ノ下受業者モ亦之ヲ顧ミサルニ至ルカ故ニ製造人等ハ自然約束ヲ守リ信義ヲ重セサルヲ得サルコトナリ又タ若シ下受業者ニシテ売込業者ニ対シ背信ノ所業アルトキハ売込業者一般ノ排斥ヲ受ケ其営業ニ差閤ヲ来シ又タ売込業者ニシテ違約背信ノ行為アルトキハ之ニ対シ注文ヲ發シタル外国商館所属「コンブラダ」^マ（外国商館ノ支那人番頭ナリ）ノ信用ヲ失フノミナラス其地方ニ於テ「コンブラダ」^マ一同ノ排斥ヲ受クルト共ニ同業組合ヲ除名セラレ終ニ廃業スルノ已ムヲ得サルニ至ルヘク而シテ「コンブラダ」^マカ売込業者ニ対シ約束ノ実行ヲ責ムルハ商館々主ニ対シ保証人ノ位置ニ立チ其違約ニヨリ館主ニ損失ヲ来シタル場合ニハ自身ニ之ヲ弁償スルノ責任アルカ故ナリト云フ」^③

この報告によると、組合員でなければ取引をすることができない仕組みになっており、「違約背信」を行った場合には、契約相手だけからではなく業界全体から排除されるメカニズムが機能していたと言う。また、広東莫蓮問屋組合の規約には、以下のような規定がある。

「一度買入約定ヲ為シタル上ハ破約ヲナシ又ハ故障ヲ申出ツルヲ得ス万一事故アリテ破約ヲナシ買入ヲ為サ、ルトキハ組合集會ヲ開キ該買手ノ屋号ヲ摘指シ暫ク之ト取引ヲ停止シ以テ弊害ヲ防ク若シ其後私ニ之ト取引ヲナス者アレハ仲間一同相談ノ上其者へ百弗ノ罰金ヲ課ス」^{②③}

この組合規約からは、組合外の違反者に対しては組合員が共同して取引停止を行い、その違反者と取引を行った内部者には多額の罰金を科すことなどが定められていた。ここで重要なのは、契約が履行されたか否かを基準に、制裁・懲罰が科されている点である。このような仕組みによって、業界内の秩序が維持されたことが窺える。当時、組合が契約・約束を「確守」させる制度として機能したのである。

後述する日本とは違い、広東の蘭荃関連業者の間では、組合内懲罰を補完する相互監視と情報共有のメカニズムがあった。次に、以

下の引用を見よう。

「支那広東地方ニ於テ洋商ヨリ若干ノ地蓆ヲ支那店ニ注文スル時ハ該店ハ直チニ之ヲ生産地ニ注文ス而シテ此生産地ニハ製造監督者アリテ常ニ各村ヲ巡回シテ事業ヲ監視シ織方着色模様等ノ一致ニ出ヅルコトヲ努ムルヨリ注文品出来ノ時ニ当リ各村ヨリノ出品井然トシテ異同ナク取引上便宜多キモ本邦九州地方ニ於テハ戸々分立気脈相通ゼズ」^{②④}

この報告が示すように、契約の不履行が生じないように、製造業者に対して監視が行われ、自らへの集団的懲罰を回避しようとしたと推察される。組合内懲罰が機能を発揮する場合、背信を速やかに発見し業界内で情報が共有されるように、情報に投資する必要があると考えられる。その結果、検査は当事者間に任せられ、くわえて抜取検査しか行われなかったことは、以下の引用にも見られる。

「支那産ハ当地ヨリ香港又ハ広東ニ注文ヲ発シ出来ノ上之ヲ船積スルニ当リ売主ト輸入者ノ支店員ト立合幾百千巻ノ中ヨリ三十巻ヲ開放シテ見本品ト同質ナルヤ否ヲ検査シタル上直ニ香港ヨリ船積ヲ了シ……(中略)……未タ嘗テ其積荷カ見本品ト相違スルカ又ハ之ヨリ劣等ナリトテ注文主ヨリ苦情ヲ申込マレシ事

実は、この引用が書かれた九年後である一九〇七年の報告には、外商がこの抜取制度に疑念を抱くようになったとの記述も見られるが、まず問題にしたい点は、このような抜取検査の慣習が定着した背景である。後述するように、日本では、組合・政府による検査制度が整備されていたが、中国は日本と異なる途を歩んだことが推察される。買弁制度は「当地（ニューヨークのこと…引用者）ノ輸入商人カ損失ヲ受ケタル場合ニハ：（中略）：其注文ヲ取扱タル商館番頭ヲシテ之ヲ弁償セシムル仕組⁽³⁷⁾」であり、外商の損失は買弁が負担する取り決めとなっていた。そのため、外商は広東の花蔴取引においてリスクを負担する必要はなく、外商にとっても、抜取検査のみでも、それほど問題が生じなかったことが推察される。生産・流通段階に関与できない外商より、監視者である中国商側に取引リスクを負担させることは、経済学からみても、ある程度合理的である。それに対して、「買弁」は日本ではみられない制度であるため、日本では、取引を円滑にする別の仕組みが必要となったことも想像に難くない。

領事報告から、組合内懲罰を補完するものとして三つの特徴を挙げておきたい。その三つを記した史料をそれぞれ引用しよう。

- ①「支那花蔴ノ製造業者ハ殆ント皆当地方売込商人ノ注文ニ基ツキ品物ヲ製造スルモノニシテ其以前ニ見込ヲ以テ之ヲ製造スルモノ甚タ僅少ナリ」⁽³⁸⁾「売込業者及下受業者ニ於テハ商館ノ注文品ニアラサレハ之ヲ取扱ハサル習慣ナレハ製産者ニ於テ猥リニ見込ヲ以テ注文以外ノ品ヲ製造スルモ其売捌ニ困難ナルカ故ニ自然見込製造ヲ行フ者稀ナリト云フ」⁽³⁹⁾
- ②「注文ノ到着シタルトキハ曾テ其見本ヲ提供シタル広東ノ清国商人ニ向テ見本ニ拠テ品質ヲ定メ又広東渡価格ト受渡時期ヲ定メ買弁ヲ通シテ注文ス而シテ清国商人ハ之ヲ自己ノ勢力範圍ニ於ケル東莞連灘等ノ製造家又ハ工場ニ対シテ其注文ヲ転交シ」⁽⁴⁰⁾
- ③「是等ノ原料ハ工場製造家ハ素ヨリ場主ニ於テ購入シ家内工業ニ於テハ自カラ購入又ハ栽培シテ其收穫ヲ以テ製織スルモノアルモ多クハ仲次問屋ヨリ一切原料ノ仕送りヲ受ケテ製蔴スルナリ」⁽⁴¹⁾

これらの引用からは、①広東ではほとんど注文によって生産・輸出されていたこと、②買弁・商人の取引は、それぞれが有する「勢力範囲」内の取引に限られていたこと、③製造家が原料の蘭草を問屋から受け取ることが多かったこと、が窺える。管見の限り、これ以上詳細な史料が利用可能ではないため、これらに関する説明は類

推の域を出ないが、組合内懲罰が有効に機能する条件を考慮すれば、類推は可能であろう。「勢力範囲」内の取引は、相互監視や懲罰が効果を発揮する上で重要であるばかりでなく、取引を注文によるものに限定し、見込取引を排除することができる。もし注文ではなく見込で生産・輸出ができることになれば、市場取引を利用して懲罰による損失を軽減することができるため、組合内懲罰で規律づけられている秩序に抜け道を許すことにつながる。抜け道が存在すれば、契約を反故にして市場取引で利益をあげることが可能になり、上記の懲罰メカニズムが損なわれる可能性を高める。この仮説が正しいとすれば、見込による生産・輸出は、広東における秩序の機能低下をまねく契機になりかねない。後述するように、日本では、組合が取引を秩序化させる仕組みが、広東ほど機能しなかったために、見込による市場取引が広範に行われ、それが、短期的には、取引の混乱や粗製濫造をまねく一因になったと考えられる。注文による取引に限定することによって、広東における取引秩序が維持された可能性が高い。さらに、問屋から原料を受け取れなくなれば、製菱は不可能になり、製菱業者にとって人質を問屋にとられているのも同然である。そのため、彼らが契約を守らない、指定された品質を維持しないといったモラル・ハザードを起こしにくくしたと考えられる。要するに、これらの取引慣行は、懲罰の強制力を強化することに資したことが推測されるのである。

しかし、実は広東の秩序は深刻な問題を孕んでいた。一九〇〇年代後半になると、従来と異なり、広東産蘭菱に関し、評判の悪い報告が並ぶようになる。

「清国花菱ニ粗製濫造ノ弊ナシトハ常ニ内外商人ノ唱導スル処ニシテ既ニ吾人ノ久シク聞ク所ナリ然ルニ彼ノ義和団事變ノ以後清国ノ人心変調ヲ呈シ旧慣ノ打破サル、モノ多キニ及ヒ玉石混淆這般ノ良習慣モ亦大ニ荒ミ明治三十五年ノ頃ヨリハ花菱ノ粗製続出シテ其結果ハ著シク米国ノ市場ニ影響スルニ至レリ」^④

この不評は、中国人の心に変調を来たというよりは、後述する日本製品の品質改善によって「相対的に」引き起こされた可能性もある。当時台頭してきた日本製品に比べ、中国製が見劣りするようになったとも言える。その不評の一因として、変化に乏しかった点が挙げられている。先述の通り、この特徴は大口取引に有利である長所にもなり得たが、次第に不評の原因にもなったと考えられる。

「模様ニ付キテ之ヲ見ルニ本邦品ハ依然縞物ヨリモ綿密ニシテ地味高尚ナル紋形景気良ク支那製品ニ対シ尚ホ特殊ノ地位ヲ占ム支那製品ハ蘭草ノ相違其他ノ関係ヨリ此点ニ於テ競争ヲ試ムルニ至ラス依然縞物ニ墨守シ而シテ縞物ニテハ綿密ナル小形好

広東の秩序は、組合内懲罰を通じ、業界全体で「契約の不履行」を防ぐメカニズムとすることができると言える。ここで重要な基準は、契約を履行するか否かである。よって、契約を厳格に定め、それに適合するように生産を行うことを第一義とするメカニズムであったと言える。そのため、契約の外で、新たな意匠に投資して巨利を得ようとすることは、組合内懲罰の下では懲罰の対象になる危険を冒すことになる⁽⁴⁾と判断されたのかもしれない。

この現象は、中国のギルドにおいて一般的に見られたようである。まず、多くのギルド内で、度量衡の統一や品質・価格統制が行われた。いくつかのギルドでは、瑕疵のある製品を「罰則によって禁止した結果、商店に見出される財貨はつねに画一的品質を持」つようになったという。また、絹織匠や金属商のギルドでは、「意匠特権の特殊利益を成員の一部のみに独占せしめなかった」のである⁽⁴⁾。また、織物でも、デザインを担当する「紋師」(図按家)は世襲の職業であり、デザインの考案を独占していたため、デザインの変更は製造業者や商人が行うことはできなかったという⁽⁴⁾。管見の限り、広東ではこのようなメカニズムが機能したのか、定かではないが、これらの特徴はこれまでの内容と符合している。製品・デザインの刷新が内部で生じなかった原因は、組合の特徴に根ざしていた可能性が

高い。広東の蘭筵製造業の強みは、品質を落とさずに、契約通りの均質的商品を大量に生産することにあったが、業界内からデザイン・製品の変化を生じさせ、製品を多様化させるメカニズムが欠如していたと言えるのではないか。

こうした状況では、外国商人側の要請という形で、外生的に変化の要因が与えられなければならない。外国輸入商の意匠に対応するという姿は一九一〇年代には見られた。

「元来支那人は其模様意匠等皆な旧態に安んじ、屢々外国当業者の注意あるも、更に改良考案の意なし、されば斬新を喜び、流行を逐ふの時代に適合する能はず、従つて外国輸入者自ら意匠を考案して注文する日に多きを加ふ」⁽⁴⁾

しかし、意匠・デザインを変更させようとする外商からの要望は、広東の商人・職工との摩擦を引き起こすことになったことは、以下の記述から窺える。

「明治…引用者」三十八年一月米国紐育ノ花筵輸入商人相連合シテ清国花筵ノ粗製ヲ詰責シ且ツ之ヲ脅迫シテ曰ク若シ清国花筵ノ品質ヲ改善スル所無クンハ自今断然清国花筵ノ輸入ヲ中止シ之ニ代ユルニ全然日本花筵ヲ輸入ス可シト告知セリ然ルニ之

ヲ聞キタル広東内地ノ当業者ハ憤然トシテ此通告ヲ排斥シ且ツ同盟シテ自今米国向花菴ノ製造ヲ拒絶スルヲ約シ結ンテ釈ケサルコト半歳ノ久シキニ及ヘリ惟フニ彼等カ相團結シテ自己ノ利益ヲ擁護シ以テ外人ニ拮抗スルノ勇氣ハ大ニ學フ可キノ活動ナルモ其事理ノ根底ニ於テ謬リタルモ其悟ラサルコト実ニ斯ノ如シ是レ清国花菴ノ将来ヲトシ甚タ悲觀スル所以ナリ」⁽⁴⁹⁾

この引用によると、広東の業界関係者が、外商の要望にボイコットで応じたのである。ボイコットは、日本と違い、外商からの不当な要求をはねつける上で有用な手段であり、外商の影響力の強さに悩まされてきた日本にとって見習うべきものではあった。しかし、変化に乏しいという産地の欠点の改善には障害になったであろう。

また、「花菴貿易ハ渠等ノ独占ニシテ其製造法価格等ニ至リテ自由ニ左右シ得ラル、モノト思惟シ頗ル尊大ナル態度ヲ採」⁽⁵⁰⁾るとの記述もあり、程度はさておき、広東の秩序は外部に対する独占を背景に維持されたものであることが窺える。⁽⁵¹⁾しかし、日本産蘭菴の台頭が中国産の独占状態を打破し、この秩序を動揺させた可能性が指摘できよう。⁽⁵²⁾そのような変化への対応策の一つが、一八九〇年頃から模索された外需への対応であった。

二〇世紀に入ると、日本の領事は広東を日本よりも遅れた産地とみなすようになっていた。その点は、明治中期の領事報告と比べる

と、隔世の感がある。その背景には、一流国になった日本の中国観が変容した事情もあったに違いないが、これまで中国にとって優位であった特質が、成長の制約に転じたことも考慮する必要がある。くわえて、日本の産地秩序が変化した点も指摘される。次節では、日本の蘭菴製造業について検討を加えたい。

3 日本における蘭菴製造業の制度・組織形態

日本の蘭菴製造業は、広東の特徴を裏返せばその特徴になると言ってもよいほど、対照的な相違を見せている。当初の日本では、広東のように産地が一つの組織として秩序を維持しているのではなく、むしろ無秩序・カオスに近い状況にあった。

「日本では…引用者）生産者が分離孤立シテ一致ノ運動ヲ欠クヨリ起ル弊害洵ニ多シ例之売手ニヨリテ売価ヲ異ニスルガ如キ投機者ノ為メニ煽動セラル、ガ如キ疎製ニ満足シテ改良ヲ図ル便ニ乏シキガ如キ眼前ノ小利ニ惑フテ故意ニ製造ヲ粗ニスルガ如キ等枚挙ニ遑アラズ勿論中国地方ノ如キ製造工場ノ組織成立チタル地方ニ於テハ此等ノ弊害少キモノ、如シト雖モ其他ノ地方ニ於テハ未ダ全ク此風氣ヲ脱セザルモノアリト聞ク：（中略）…本邦九州地方ニ於テハ戸々分立気脈相通セズ且製造監督者ナキヲ以テ注文品出来ノ上甲ハ乙ト模様ヲ異ニシ丙ハ丁ト染

方ヲ同フセズ為ニ取引上手数ヲ要シ時日ヲ遷延スルノ憂アリト云ヘリ」

日本でも、程度の差はあれ、製造業者は「眼前ノ小利」、すなわち短期的視点を重視して「粗製濫造」に走った実態が読みとれる。

概して高品質の花薙を生産していた岡山の方が零細業者が少なかったため、岡山の方が、取引秩序が安定していたことも事実であったが、岡山でも広東のような状況にはなかった。日本では、広東と違い、品質もデザインもまちまちであり、当初は、それを規律づける制度も欠如していた。

日本では、注文品 (contract goods) とともに、注文によらない「在合品」 (ready-cargo goods) の取引が広範に行われた点も、広東とは異なる点である。⁽⁵⁴⁾ 広東では、ほぼ注文取引に限定し、市場取引を介さないことによって、契約不履行を防止したようであるが、日本の各産地では、そうした取引慣行は安定しなかった。

たとえば、日本産花薙が流行を博したときには、注文品を生産せずに粗製品を市場に流すなど、顧客の信用を犠牲にして短期的利益を追求することが頻繁に散見されたという。通常、注文品の価格は、「在合品」よりも、若干高めに付けられたが、蘭草・蘭薙価格が急激に上昇したときには、良質の注文品を作って取引先に売るよりも、粗製品を生産して市場で販売する方が利益になり、そのため、実際

に注文を反故にしたり、注文品の品質を落としたりする事例が数多く見られたのである。このような行動は、約束を守る広東商人に対し、約束を守らない日本人という印象を外商に持たせたことは想像に難くない。花薙の需給が逼迫した状況下では、「各商館が態々店員を産地に特派し買入に着手」⁽⁵⁵⁾する状況が生じていたが、逆に入荷の多いときは、外商が恣意的に基準を厳格にし、安く買いたたく事例 (当時、「ベケ権の濫用」と呼ばれた) も生じていた。⁽⁵⁶⁾ 商人・生産者の短期的取引と外商の恣意的取引とが、いわば「不信の連鎖」を生み出したと言えよう。このように、当初、日本では長期的取引はきわめて脆く不安定であった。同時に、価格上昇のときには多数の花薙をみだりに生産・販売するため、後に値崩れをおこすことにつながり、日本の花薙価格の変動が激しくなるといふ弊害をも伴ったのである。

注文品以外の取引が存在することが、粗製濫造の温床になったと考えられる。また、使用する資本も少額で済むため、小生産者が多数存在し、彼らは花薙価格の上昇とともに参入し、下落とともに退出するような行動を繰り返した。以上の激しい参入・退出が容易な理由として、以下の下線部にあるように、資本財を自由に売る市場の存在も挙げられる。

「当時ハ花薙業ハ多クノ投機的分子ヲ含ミ、且外商ハ利益ヲ壟断シテ専横ヲ極メタリケレバ会々一外商ノ破産ハ有力ナル動機トナリ是

等多数ノ工場ハ多ク其機ヲ売リテ業ヲ廃セリ」⁽⁵⁷⁾

激しい参入・退出戦略が支配的であれば、長期的利益を軽視することにつながったと考えられる。当時は組合組織が強固に存在しなかったため、独立した小生産者の粗製濫造（モラル・ハザード⁽⁵⁸⁾）を抑制するメカニズムが備わっていなかった。「在成品」の製織・販売や他の要因によって、短期的利益を追求する傾向が強まり、それが「売買者相互間ニ屢々交渉ヲ要セシ等ニテ、商談円滑ニ運ビ難ク」なる主な要因になったのである。

さらに、原料の蘭草を誰から受けるのか、という点でも、広東と違いがあった。先述の通り、広東では「仲次問屋ヨリ一切原料ノ仕送りヲ受ケ」て生産を行ったとの記述があったが、日本については、以下の記述が見られた。

「我邦花菱業ノ生産組織ハ、多クノ場合ニ於テ家内工業ノ組織ヲ取り、製菱者ハ同時ニ蘭草栽培者ナル事多ク、時トシテ仲買ニシテ原料ヲ給スル事アレドモ、是等ノ場合ニ於テハ格別規則立チタル取引方法備ルコトナシ」⁽⁵⁹⁾

その後の史料には、原料の買い付け方法として「一。農夫ヨリ直接ニ製菱業者ニ売渡ス 二。農夫ヨリ仲買ヲ經テ製菱業者ニ売渡ス 三。農夫ヨリ仲買ヲ經テ思惑師ニ渡リ更ニ仲買ヲ介シテ製菱者ニ

渡ル」⁽⁶⁰⁾が挙げられ、最も広範に行われているのは、第一の方法であったと書かれている。蘭草を自ら栽培したり、農家から自由に購入できたりする状況では、業界内の懲罰だけで市場を秩序化する機能をさらに弱めることになる。集团的ルールに反しても、他の取引方法が存在することによって、それ以外の販売・取引を可能にし、同業組合の科す「罰」の効果が軽減されると考えられるからである。しかし、無秩序とでも呼びうる競争が展開された状況は、別の長所を持つようになった。それは、各製造業者がそれぞれ独自に意匠を開発し売りこむ結果、日本産花菱が多様な模様・意匠を持った点である。

「我が国（日本…引用者）にては、専ら輸出品に対する嗜好を考へ、其の模様の如きは日に新に、斯業者は汲々之れが進歩を計り営々として之れが発達に努め其の縁取の如き微細なる点までも、細心鋭意専ら改良をこととす」⁽⁶¹⁾

「本邦品ニアリテハ…（中略）…模様ニハ絶エズ改良ヲ加ヘ一部新意匠ヲ加ヘタリト認ムベキモノアリ」⁽⁶²⁾

この特徴が広東では見られなかったことは、既に論じた。このような意匠の開発は、同時期に発達していた特許・実用新案・意匠・商標などの工業所有権制度の発展を背景に展開された⁽⁶³⁾。広東では、

英国領事によると、商標の偽造は詐欺 (defrauding) として損害賠償の対象となったものの、新発明の模倣は当然の行為と考えられていたという⁽⁶⁵⁾。それに対し、日本では、新たな意匠や技術が業界外にある政府に保護されるという経過をたどった。そうした傾向は、政府が無秩序な競争を秩序化する上で、重要なファクターであったことを示している。日本における政府の役割は、政府とは自律した秩序を構築していた広東とは対をなしているのである。

このような状況下で「粗製濫造」問題を解決し、産地内の取引秩序を構築するために、同業組合が組織され、製品検査が普及していった。岡山県の同業組合に関する引用を以下に示そう。

「明治二十三年に至り…(中略)…花筵同業者のみを以て一組合を組織し斯業を統一して、其の発展を企画するの急務を感じ当局者の勧誘有志者の斡旋当業者の覚醒と相俟ちて明治二十四年十二月十四日遂に同業者協議会を都宇郡茶屋町に開催し、花筵業組合創立に関し議定し之が創立準備委員を選定するに至り⁽⁶⁶⁾」

「粗製品を防遏する為め明治三十一年重要輸出品同業組合法に拠り法定の組合となすに当り其の定款中に製品検査施行に関する規定を設け検査所を岡山市に支部を庭瀬、倉敷、早島、茶屋町、妹尾、玉島、笠岡、九蟠、三蟠(其の後廃合増減等あり)

に置き三十二年一月より検査を実施せしが、同年三月十五日、日本花筵同業組合連合会に於て検査事業を開始するに至り之を廃止せり⁽⁶⁷⁾」

前者の引用からは、同業組合が、政府によって主導されたというよりも、有志・有力者が粗製濫造を問題視して、業界内から自生的に組織されたことが分かる。そして、検査制度が組合の主要な業務になっていった。その後、官設の花筵検査所が、生糸検査所に次いで設立されたが、後者の引用が示す通り、その設立以前に法律の力を借りたとしても、検査を実施することが、有力な業者の間で暗黙の了解になっていたことは、特筆すべきである。すなわち、業界内から組合・検査の必要性が叫ばれ、それを政府が追認するという経緯をたどったのである⁽⁶⁸⁾。検査の必要性は業界内部で共有されていたと言える。

工業所有権の保護にくわえ、同業組合を追認・強化することが政府の役割であった。蘭筵製造業界では、粗製濫造を回避するために同業組合が組織され、その組合によって輸出品検査が開始された。各地の同業組合は、投機家の小生産者の参入・退出を防ぎ、さらに輸出品検査を実施して品質の保証を試みた。しかし、同業組合の間で検査基準がまちまちで、さらに強制的手段を伴わないことから、先のように花筵価格が上昇すると検査が有名無実化する危険性を常

表1 蘭菱製造業における中国・日本の特質

| | 中国（広東） | 日本（岡山・九州） |
|--------|--------------------------|--------------------------|
| 秩序化の方法 | 組合内懲罰 | 緩やかな同業組合＋政府 |
| 同業者組織 | 契約履行を主とする | 品質保証・改善を主とする |
| 契約の遵守 | 「確守」する傾向 | 当初は契約を破ること多し |
| 商品の品質 | 少品種大量生産（画一的） | 多品種少量生産（種類豊富） |
| 粗製濫造 | それほど深刻ではない それほど問題視されず | 当初は深刻 |
| 考慮する利益 | 長期的利益重視の傾向 | 当初は短期的利益重視 |
| 買弁制度 | あり（外商の産地買付無） | なし（外商の産地買付有） |
| 注文品 | ほとんど注文品取引 | 市場取引多し |
| 産地内取引 | 相対取引 | スポット的取引も多し |
| 品質検査 | 公的検査制度なし | 組合・政府が検査 |
| 政府の役割 | 消極的・ほぼ無関係 | 積極的（検査など） |
| 全体の印象 | 規律・外に対する独占・閉鎖的・固定的・画一的 | 自由・当初は無秩序な競争・開放的・伸縮的・多様性 |

〔出所〕筆者作成

に孕んでいた。そのため、政府が花菱検査所を設け、強制手段を伴う輸出品検査を行うようになった。こうした動きは、広東のような強制的手段を伴う同業組合の役割を政府が代行したものともみることができる。日本では、同業組合が独立して強制的手段を持ち得なかったために、重要輸出品同業組合法（一八九七年）、重要物産同業組合法（一九〇〇年）など、政府の力によって市場の秩序化を試みる

法律が、重要輸出品から国内の重要産品に範囲を広げながら、立法化された。日本の場合、同業組合は不完全であったために、政府がその問題点の解消に努め、同業組合と政府の補完的分業関係が構築されたのである。中国では、十分な所有権保護や度量衡・貨幣制度

の不統一といった問題に対し、政府が積極的役割を担わなかったことから、産业内から生まれた組合が、日本における政府の役割をも兼ねることによって、上記の問題を解決し、結果的に経済に対する政府の役割をさらに低下させるという循環が生じた。^⑦ その結果、中国では、品質の改善よりも、契約履行を中心とした取引秩序の維持が同業者組織の主目的であり、契約履行の中に品質の保証も含まれていたと言える。それに対し、日本では、同業組合が、政府の追認・補強を経て、粗製濫造を緩和し、品質を保証したのである。つまり、品質保証が同業者組織の役割となったのである。もし日本が優れているとすれば、政府と同業組合が役割を分担することを通じて、個々の小生産者の自由をある程度維持しつつ、他方で取引を安定化することができた点に求めることができる。

4 むすびにかえて

以上のように、日本と中国の取引慣行は対照的であった。それらの特徴は、表1のように、それぞれ相互に補完しながら、対照的なシステムを構成していたことが分かる。^⑧

従来、近代化を遂げた日本が経済的に進んでおり、逆に中国は遅れていると言われてきた。確かにそうした面があるのも事実であるが、中国の方が先んじていた蘭菱製造業では、むしろ中国の方が日本より優れている面もあった。そして、そのような取引慣行は同地

の蘭薊製造業の発展に寄与したのである。中国の蘭薊製造業は日本より優れた長所を備え、日本の各産地は、領事報告から中国の取引慣行に関する情報を摂取しうる環境にあった。同業組合や検査制度といった制度の導入に、中国から伝えられた情報が生かされたかどうか、現段階では分らないが、仮に中国からの情報が生かされたとしても、その改革の結果は両国で異なるものになったことは、以上の分析から示唆されよう。すなわち、両国は異なる制度・慣行・文化にあるため、結果も異なるものとなったことは想像に難くない。⁽²⁾中国では、取引を限定し、それによって取引を秩序化させた。それに對し、日本では、取引を狭い範囲に限定できなかったために、政府と同業組合が密接な補完関係を構築し、同業組合が検査などを通じて取引の秩序化を行うという解決策を模索した。⁽³⁾花薊製造業のみから、この仮説を一般化することは難しいが、政府と同業者組織が競合関係にある中国と、補完関係にある日本という違いが浮かびあがってこよう。⁽⁴⁾日本の特徴は、長期的・巨視的観点に立てば、頻繁に生じる国際市場の変化に対応し、人的資本・熟練を蓄積する上で優れていたと言えるかもしれない。しかし、その場合でも、中国が劣っているのは、中国が非合理的であったからではなく、合理的であったとの視点をとる必要があるように思われる。

注

(1) 本稿は平成十五年度日本学術振興会科学研究費の成果の一部です。最初に、執筆段階でご助言いただいた方々、そして本稿を読んでいただきコメントをいただいたレフェリーの先生方に、感謝の意を表したいと思います。なお、当然ながら、ありうべき誤りはすべて筆者に帰するものです。

(2) 「アジア間競争」については、川勝平太「日本の工業化をめぐる外庄とアジア間競争」(浜下武志・川勝平太編「アジア交易圏と日本工業化 一五〇〇—一九〇〇」リプロボート、一九九一年「二〇〇一年に藤原書店より復刊」所収)、一八一—一八九頁。

(3) 神立春樹「日本花薊の対アメリカ輸出停滞をめぐって」(同『近代蘭薊業の展開』御茶の水書房、二〇〇〇年、第五章所収)、清川雪彦・牧野文夫「花薊産業における技術改良の意義—明治期農村工業品の輸出促進要因の検討」(『経済研究』第四九卷第三号、一九九八年七月所収)。

(4) 当時、現在の「中国」は「支那」と呼ばれ、逆に当時の「中国」とは日本の中国地方を指す。しかし、当時の用語を踏襲することとは誤解をまねきかねないため、本稿では、引用文以外では、清国・中華民国を「中国」とし、日本国内の地方は「中国地方」として区別する。

(5) 神立氏は、第一次大戦前の統計に依拠しているが、後掲の図1によると、第一次大戦以降、日本のシェアは上昇している。同時期は、賃金が高騰した時であるため、日本のシェア変化を低賃金にのみ帰することはできないことが分かる。より広い視野から捉えなけ

ればならないのではないか。

- (6) 神立氏の著作も、品質の差に言及しているが、結局のところ、輸出競争力を価格差に帰していると言えよう。

- (7) 「蘭荳」という用語は、花菱・畳表など蘭草で作られた数物の総称として用いる。

- (8) 岡山では、比較的高級な花菱を生産していたため、当初は工場制が優位にあった。その意味では、他の主要産地（福岡や広島）に比べると特異な性格を有していた。しかし、『岡山県統計書』によると、二〇世紀初頭には、平均の生産規模が縮小し、他の産地との違いがなくなっていく。この点については、高田正規「商品生産的農業地域の形成―蘭作Ⅱ加工業地域の場合」(『瀬戸内海研究』第一号、一九五八年所収)、神立春樹「明治期における花菱業の展開」(同、前掲『近代蘭荳業の展開』所収)、上廣尚子「明治期岡山県南部地域における輸出向け花菱生産の展開―浅口郡和荳館を事例として」(『地方史研究』第五三巻第六号、二〇〇三年十二月所収)など参照。以下に登場する史料からも、産地ごとの違いは、日本と中国の違いに比べて、小さいと考えられる。よって、岡山・福岡を同列に扱うことにする。

- (9) Pomeranz, Kenneth, *The Great Divergence: China, Europe, and the Making of the Modern World Economy*, Princeton University Press, 2000, p.10では、「筆者にとって同様に位置づけられるように見えるヨーロッパの一部、中国・インドの一部などを相互に比較する」ことが意味のある比較になるとしている。

- (10) 日本の領事報告に関しては、角山榮編『日本領事報告の研究』

同文館、一九八六年、特に第Ⅰ部、同著『通商国家』日本の情報戦略―領事報告をよむ』NHKブックス、一九八八年、杉原薫「明治日本の産業政策と情報のインフラストラクチャー」(同『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房、一九九六年所収)など参照。

- (11) 単価は輸入額÷輸入量(単位はそれぞれドルと平方ヤード)によって算出。ただし、例外的に一九三〇年代前半になると、為替安などの影響からか、日本産の単価のほうが安くなっている。
- (12) これらのデータは非定常であるため、「見せかけの回帰」を回避するため、一次階差の回帰分析・相関係数などを考えたほうが望ましい。山本拓『経済の時系列分析』創文社、一九八八年、第二章参照。

- (13) 重回帰分析などを使用しても、価格比の係数が有意ではなく、価格比が日本からの輸入量や日本のシェアに影響を与えたとは言えない。弱いながらも正の相関が見られたことを認めるとすれば、価格面で競争したというより、粗製濫造(＝価格下落)による需要の減少、もしくはその逆が生じていたことを意味しよう。ちなみに、一九一八年以降のデータを用いても、この結論に違いはない。

- (14) 「紐育市場ニ於テ日本製麦藁組紐、麻綿段通及ヒ備後花蓆ノ景況」(『通商報告』第五七号、明治二十一年三月二十四日発行)。

- (15) 「紐育市ニ於ケル本邦産地蓆ノ商況并ニ製造家及取引者ニ対スル注意」(『通商彙纂』第二三三号、明治二十八年八月十五日発行)、一一―一二頁。

- (16) たとえば、同上報告、一〇頁。

- (17) 神立春樹「明治中期―大正期の蘭荳生産」(同、前掲『近代蘭

薙業の展開」所収。

- (18) 「シカゴ花薙商況」(『通商彙纂』明治三十七年第十七号、同年三月二十三日発行)、六頁。

- (19) 「支那花薙…当業者の視察談」(『神戸又新日報』大正十三年二月二十四日発行)。

- (20) 外務省通商局『日印貿易便覧』一九三〇年、一七八頁。

- (21) 「紐育ニ於ケル本邦花薙市況(商業)」(『通商彙纂』明治四十年第二三号、同年四月十八日発行)、五頁。

- (22) 「シカゴニ於ケル本邦製華薙」(『通商彙纂』第一五六号、明治三十三年一月十八日発行)、七頁。

- (23) 「紐育ニ於ケル本邦産華薙」(『通商彙纂』第一五六号、明治三十三年一月十八日発行)、二頁。

- (24) 農商務省商工局編『南清貿易調査復命書 第一編 花薙ニ関スル報告』一九〇七年、二二頁。

- (25) たとえば、「広東花蓆商況」(『通商彙纂』明治三十七年第五〇号、同年八月二十八日発行)、八頁。

- (26) 「紐育ニ於ケル本邦製花薙商況」(『通商彙纂』明治三十七年第四七号、同年八月十三日発行)、七頁。本来の記述では、共通する部分に「全」、もしくは「同」を使っているが、ここではそれらを使わず、本来の意味に置き換えた。

- (27) 日本の花薙価格は、1. 註文品と有品の差、2. 種類の差、3. 品質の差、4. 産地の差、5. 意匠の差、によって区分されていた。平井真次郎『日本花薙業調査報告書』東京高等商業学校、一九〇七年、一二七―一三〇頁。

- (28) *British Parliamentary Papers* (以下、B.P.P.と略す)、1909, Vol. 92, [Cd.4447-2] "Report on the Mating Industry in Japan," p.5.

- (29) 以上は、農商務省商工局編、前掲『南清貿易調査復命書』三九頁。

- (30) 前掲「紐育市ニ於ケル本邦産地蓆ノ商況并ニ製造家及取引者ニ対スル注意」一五頁。

- (31) 「紐育輸入本邦花薙商況並其改良ノ要点」(『通商彙纂』明治三十六年改第一八号、同年六月二十三日発行)、七頁。

- (32) 「広東花呉坐製造及取引景況」(『官報 通商報告』第二五八号、明治二十五年一月十三日)。他にも、代金の割引などに対して、同様の処罰・制裁が科されるとの規定がある。

- (33) 二〇世紀に入ると、「若シ強テ營業上ニ関スル組合ナルモノヲ認メント欲セハ広東ニ於ケル花薙商人ノ一団ナリト雖是レ又組合規則ノ協定セルモノナク尋テ役員等ノ設ケアルニ非ス只当業者カ時ニ応シテ相集リ相協議スル不文的一団ニ過キス然レトモ苟モ事ノ斯業ニ関シ利害ノ影響絶大ナルノ場合生スルトキハ製造者又ハ商人或ハ共ニ提携シ相團結シテ居留外商ニ当ルノ行動等ハ頗ル強固激烈ヲ極メ却テ居留外商ハ彼等ノ掌裡ニ翻弄セラル、コトアリ」(農商務省商工局編、前掲『南清貿易調査復命書』三四頁)とあり、不文律に支えられていた点を、本文と整合的に理解することは難しい。組合規約が廃止されたのか、または執筆者がそれを見落としたのか、はつきりとは分らないが、提携・團結のあり方は変わっていないことは言えよう。

- (34) こうした特徴は中国のギルド一般に見られるようである。上海

- 出版協会調査部編著『支那の同業組合と商慣習』同協会、一九二五年、仁井田陞『中国の社会とギルド』岩波書店、一九五一年など、戦前期のギルドに関する研究を参照。また、この特徴はグライフ氏の言っているギルドを通じた多角的懲罰 (multilateral punishment) に近いものがある。Greif, Avner, Paul Milgrom, and Barry Weingast, "Coordination, Commitment and Enforcement: The Case of Merchant Guild," (in *Journal of Political Economy*, Vol. 102, No. 4, 1994); 岡崎哲二『江戸の市場経済—歴史制度分析からみた株仲間』講談社、一九九九年。
- (35) 前掲「紐育市ニ於ケル本邦産地蓆ノ商況并ニ製造家及取引者ニ対スル注意」一三—一四頁。
- (36) 「米国ニ於ケル花蕨商況及本邦商人ノ注意」(『通商彙纂』第一一五号、明治三十一年十一月八日発行)、三頁。
- (37) 農商務省商工局編、前掲『南清貿易調査復命書』二七頁。
- (38) 「紐育輸入本邦産花蕨商況」(『通商彙纂』明治三十六年改第一一五号、同年五月十八日発行)、四頁。根岸佑「買弁制度の研究」日本図書株式会社、一九四八年や、買弁の制度史的研究である王穎琳「一九世紀中国の対外取引と買弁制度」(岡崎哲二編『取引制度の経済史』東京大学出版会、二〇〇一年所収)も参照。
- (39) 前掲「紐育輸入本邦産花蕨商況」四頁。
- (40) 前掲「紐育輸入本邦花蕨商況並其改良ノ要点」七頁。
- (41) 農商務省商工局編、前掲『南清貿易調査復命書』二六頁。
- (42) 注(41)同書、一五—一六頁。
- (43) 注(41)同書、三五頁。
- (44) 「米国ニ於ケル本邦製花蕨市況」(『通商彙纂』明治四十年第六二号、同年十一月三日発行)、一一頁。
- (45) この取引慣行がグライフ氏や岡崎氏によって指摘された「多角的懲罰」戦略に近いことは既に指摘した。これが多様性を失わせる可能性は、Clay, Karen, "Trade without Law: Private-Order Institutions in Mexican California," (*Journal of Law, Economics, and Organization*, Vol. 13, No. 1, 1997)から示唆される。それによると、メキシコ領時代のカリフォルニアでは、商人の特性が多様で、取引が「関係特殊的投资」に依存したため、懲罰の費用が高くなり、グライフ氏の言う「多角的懲罰」が頻繁には行使されなかったと結論づけている。逆に、「多角的懲罰」の有効性が失われないためには、商人の特性が多様ではなく関係特殊的投资に依存しない条件が必要であるかもしれない。ここでは、その可能性のみを指摘しておきたい。
- (46) 以上は、清水盛光「支那社会の研究—社会学的考察」岩波書店、一九三九年、五五—五六頁。
- (47) 東亜同文書院編『支那経済全書』第一輯、東亜同文会編纂局、一九〇八年、八三四頁、農商務省編『清国染色刺繍物ニ関スル意匠図按調査報告』、一九〇四年(明治後期産業発達史資料)第四一六巻、龍溪書舎、一九九八年所収。
- (48) 東亜同文会編『支那省別全誌 第一巻広東省附香港澳門』同会、一九一七年、八五五頁。
- (49) 農商務省商工局編、前掲『南清貿易調査復命書』四六頁。
- (50) 「外務書記生隈部軍蔵 清国広東出張視察復命書」(『通商彙纂』

明治三十八年第六五号、同年十一月十三日発行）、二八頁。

(51) たとえば、清水盛光、前掲『支那社会の研究』四八～五三頁も参照。

(52) 同時期に、中国で旧来の経済秩序が解体していったとする見解もあり、それとの関連も指摘できるかもしれない。たとえば、本野英一『伝統中国商業秩序の崩壊—不平等条約体制と「英語を話す中国人」』名古屋大学出版会、二〇〇四年を参照。

(53) 前掲「紐育市ニ於ケル本邦産地蓆ノ商況并ニ製造家及取引者ニ対スル注意」、一三～一四頁。

(54) *B.P.P.*, 1909, Vol.92, [Cd.4447-2] “Report on the Matting Industry in Japan,” p.9.

(55) 『神戸商工会議所月報』第一〇号、明治三十五年十一月二十八日発行、一一頁。村田誠治編『神戸開港三十年史』下巻、神戸市開港三十年紀年会、一八九八年、六五三頁にも、「特に華蓆、輸出米等を扱ふ商館は、番頭を派遣…（中略）…するもの少なからざるに至りき」との記述がある。花蓆以外にも、多かれ少なかれ、見られたであろう。*B.P.P.*, 1909, Vol.92, [Cd.4447-2] “Report on the Matting Industry in Japan,” p.9を参照。

(56) 平井真次郎、前掲『日本花蓆業…』一九四頁、前掲『神戸開港三十年史』下巻、六五一～六五二頁。

(57) 平井真次郎、前掲『日本花蓆業…』六〇頁。

(58) 粗製濫造をモラル・ハザードと捉えるだけではなく、技術的側面も考慮すべきであるとの見解もある。橋野知子「織物業における明治期『粗製濫造』問題の実態—技術の視点から」（社会経済史

学』第六五巻第五号、二〇〇〇年所収）。

(59) 農商務省商工局編『重要輸出品要覧 後編』一九〇八年、三二八頁。

(60) 平井真次郎、前掲『日本花蓆業…』四六頁。

(61) 平井真次郎、前掲『日本花蓆業…』四六頁。

(62) 東亜同文会編、前掲『支那省別全誌 第一巻』八五五頁。

(63) 「米国ニ於ケル本邦製花蓆商況」（通商彙纂）明治四十年第四三号、同年七月二十八日発行）。

(64) 同時に花蓆生産の技術開発も進み、日本の要素賦存に適合的な織機（適正技術）の発明につながった。中国では、こうした技術発展は緩慢にしか進まなかったという。清川・牧野、前掲「花蓆産業における技術改良の意義」参照。当時、特許制度の必要性が痛感された事例として、磯崎眠亀による錦華蓆の発明がある。

(65) *B.P.P.*, 1909, Vol.93, [Cd.4446-127] “Report for the Year 1908 on the Trade of Canton,” p.15.

(66) 岡山県重要物産同業組合連合会『岡山県重要物産同業組合誌』一九三〇年、二二頁。

(67) 注(66) 同書、二九頁。

(68) この点を先駆的に指摘したものとして、正田健一郎「明治前期の地方産業をめぐる政府と民間」（高橋幸八郎編『日本近代化の研究（上）』東京大学出版会、一九七二年所収）。

(69) 後に、検査の有無というよりは、主に検査のやり方に対して、根強い異論が存在したようである。たとえば、組合理事長松原氏は、「近頃は一般に価格の低廉なものが歓迎される傾向がある、斯の如

き際は如何にして生産費を低廉ならしめて註文主の希望に応ぜしむべきかの問題を考へなければならぬ、然るに徒らに法文に拘泥して融通の利かぬ検査のやり方を為すため当業者は遂に折角註文に接しながらソレに応じ得ず斯くて輸出額が漸減し遂に斯業の没落を招来するに至るのである、野草菱検査を政府が開始するに当つては宜しく花菱検査の失敗に鑑み之を組合の仕事に委すか然らずんば当業者及び組合の意嚮を尊重して輸出旺盛を期することが必要である」と述べている（「愈十一月から野草菱検査実施―検査規定と組合の反対意見」『神戸新聞』大正十三年九月十八日発行）。しかし、この議論でも、検査の必要性は前提にされていたと言える。

(70) 仁井田隆、前掲『中国の社会とギルド』二四〇～二四四頁によると、民国期には政府主導の同業組合である「公会」が組織されたが、旧来の同業組合（「公所」と併存し、公会の機能は官憲との交渉（たとえば配給）などに限定されたようである。政府と同業組合との関係が日本と異なっていたことは明らかである。

(71) この補完関係は、「制度的補完性」と呼びうるものであろう。青木昌彦『比較制度分析に向けて』（瀧澤弘和・谷口和弘訳）NTT出版、二〇〇一年、二四五～二五〇頁。

(72) 当時の領事にもそのような認識があったようである。前掲「紐育輸入本邦花菱商況並其改良ノ要点」八頁には、「本邦ト清国トハ百事々情ヲ異ニスルカ故ニ彼国ニ於ケル花菱業ノ組織ヲ其儘我当業者ニ採用セシムルコトノ困難ナルハ勿論」であったとの記述がある。

(73) 山岸俊男氏はこの点について示唆的なことを述べている。氏によると、マグリブ商人とインターネット取引を事例に、前者が悪い

評判の人を構成員から排除する閉鎖的な仕組みである一方、後者は、開放的であるために、悪い評判の人を排除できず、代わりによい評判の人と次第に取引を集中させる（すなわち、ブランド化が支配的な）仕組みであったと言う（山岸俊男「開放的な「信頼社会」を」『日本経済新聞』二〇〇四年三月二十三日）。花菱に関する限り、中国では前者、日本では後者に近い仕組みが採用されたと言えよう。但し、山岸氏の日本に対する見方は前者に近い社会であり、その点では氏の認識と異なる。

(74) 中国における国家の役割が西洋の国家概念と異なることについては、Wong, R. Bin, *China Transformed: Historical Change and the Limits of European Experience*, Cornell University Press, 1997 参照。政府と市場の関係が国によって異なる点については、Aoki, Masahiko, Kevin Murdock, and Masahiro Okuno-Fujiwara, "Beyond the East Asian Miracle: Introducing Market-Enhancing Views," (Aoki, M., H. Kim and M. Okuno-Fujiwara, eds., *The Role of Government in East Asian Development: Comparative Institutional Analysis*, Clarendon Press, 1996) などを参照。